

古事記誘導編

リ 5
5117
2





英譯古事記誘道寸編

下

木村一步譯





6.12.28

最古學識 = 富メル本居氏ノ如キモ亦其古事記

傳ノ總論 ノ自註ニいま神代の文字かといふを

の阿るハ後世人の偽作子ていふ子たをト記

載セリ然レモ古代日本ノ交際ノ状態ヲ説クニ

當リテ神字ノ偽作ナラザルヲ辨スル者アリ

且古代傳説中ニ全ク此論項ヲ載スルヲナキガ

故ニ聊カ爰ニ一言セザルヲ得ザルナリ

○第五 古代日本人ノ宗教政治ノ思想日本

國ノ起原及ヒ日本記録ノ眞偽

抑今日神道ヲ唱フル者ノ宗教ノ思想ハ之ヲ推

木村一歩

知スル、甚ダ難シトヒ、唯百五十年前ヨリ佛
教儒學ノ勢力ヲ撲滅セン、ヲ企圖シテ、終ニ少
シク之ヲ壓倒スルノ功ヲ奏シタル神道家ノ著
書ヲ涉獵セハ、則チ可ナラン、然レモ一千年
以前ノ昔ニ溯リテ、其時代ノ宗教ノ思想及ヒ働
作ヲ推知スルノ困難ナルハ、獨リ日本ノミナラ
ズ、他ノ諸國ニ於テモ亦然リ、凡テ支那開化ノ傳
來ノ以前ニ於テ、日本人ノ懷抱セシ原始ノ諸説
ヲ發見セント試ムルノ擧ハ實ニ容易ナラザル
困難事ト謂フベシ、何トナレハ、當時圖書ノ參考

ニ供スベキ者甚ダ乏シク、又近世註釋ノ書アリ
ト雖、凡悉皆豫定ノ説ニ因リテ註釋シタル者ニ
シテ、毫モ信スルニ足ラズ、人種ト神傳ト混淆錯
雜シテ分別スルヲ得ズ、又圖書ノ編輯アリシ
以前ニ於テ、既ニ支那ノ思想ノ滲入スル者アリ
テ、之ガ為ニ大ニ此議題ヲ混亂錯雜セシムルヲ
以テナリ、然レモ此等ノ事タル、今迄外國人ノ注
意セザリシ所、又本居氏平田氏ノ如キ日本著述
家ノ故ヲニ暗昧ニ附シテ顧ミザリシ所ナリ、
又政治ノ範圍内ニ於テハ、其困難減セズ、テ却

テ増ス者ト謂フベシ、何トナレハ第六七世紀ノ
頃日本王室ハ威權ノ確立シ中央集權ノ政畧ハ
整頓スルニ及ビテヤ執權者ハ自己ノ便利ヲ謀
リ其以前ニ行ハレタル種々ノ制度ノ痕跡ヲ消
滅シテ以テ人民ヲシテ今日ノ制度ノ毫モ往昔
ノ制度ヲ改メタル者ニアラザルヲ信セシム
ルハ措置ヲ施シタレハナリ夫ノ第八世紀ノ頃
天武天皇ガ舊家ニ蓄藏スル所ノ歴史ヲ以テ正
實ニ違ヒ虚偽多シト爲シテ之ヲ訂正セント企
圖シ又日本紀ハ撰者ガ精巧ナル年表ヲ偽作セ

ント企圖シタルヲ視レハ之ヨリ以前ノ時代ニ
於テハ其擧ヲ妨害スル者更ニ少キヲ以テ之
ト等シク歴史ヲ改正スルノ擧アリシヤモ亦未
ダ知ルベカラザルナリ是レ余輩此章ニ於テ古
事記ヲ細讀シ傍ラ日本紀ヲ参考シテ以テ二三
ノ説ヲ述ブルノ際狐疑猶豫ノ心ヲ懷キテ之ヲ
看シヨクヲ讀者ニ希望スル所以ナリ然レ其正
筆ノ部ニ於テハ固ヨリ然リト雖其反筆ノ部
ニ至リテハ狐疑猶豫ノ心ヲ懷キテ之ヲ看ルヲ
要ヒザルヲ知ラザルベカラズ何トナレハ古

代ノ歴史ハ矛盾ノ説甚ダ多ク、而シテ精細ニ詮
鑿スレハ其矛盾益甚ダシケレハナリ、余輩ハ此
章ニ於テ古事記ノ断篇残章ヲ補綴シテ、日本古
代ノ宗教思想ノ解説シ、又日本ノ人民ヲ組織セ
ル太古ノ人種ニ就キテ、二三ノ臆説ヲ述ブル所
アラントス、然レモ亦是ヨリ先キニ舊時ノ傳説
ヲ略叙セザルベカラズ、是レ宗教上ノ思想、制度、
人種及ヒ記録ノ真偽ノ四問題ハ、悉皆互ニ相連
續シテ、唯一ノ錯雜セル問題ヲ成セバナリ、
上古日本ノ傳説ノ大畧ヲ叙述スレハ、則チ左ノ

如シ、太初永遠ノ時代ニ數多ノ獨化神生誕シ、
員數ハ古事記ニ載スル所ト、日本紀ニ載スル所
ト、各相同シカラズ、其中ニ伊弉那岐神、伊弉那美
神ト稱スル兄ト妹トアリ、相婚媾シテ日本群島
ヲ生シ、既ニ群島ヲ生シ終ヘテ、又數多ノ男神女
神ヲ生メリ、但シ此男神女神ハ天然力ヲ假リテ
神ト為シタル者ノ如クニシテ、余輩ノ所謂「
ルソニファイケトシヨシ」ナリ、
ト云フ做ナリ、其後伊弉那美神ハ、火神（迦具土神）ヲ
生ムガ為ニ死シ、次ニ神傳ノ最モ感覺ヲ起スベ

キ一段ノ說話起リ、初メニハ伊弉那岐神其妻神
ヲ追ヒテ黄泉ニ入り、之ニ還ラントヲ勸ム、妻神
モ亦還ラントヲ欲シテ、黄泉ノ神祇ト商議スル
ノ間、其夫神ヲ待タシム、夫神待ツトノ久シキニ
堪ヘズシテ、左鬢ニ挿シタル湯津津間櫛ノ末齒
ヲ牽キ折リ、之ニ點火シテ内ニ入りシニ、膿沸キ
虫流レテ其中ニハ雷神ノ居リシトヲ記シ、又夫
神ノ黄泉ノ兵士ニ逐ハレテ逃遁スルヤ、三個ノ
桃實ノ援ケヲ假リテ其兵士ヲ退ケ、其桃實ノ功
勲ヲ賞シテ之ニ神號ヲ與ヘタルト、又黄泉比良

坂マテ追ヒ來タレル妻神ニ對シテ、夫神ノ言ヲ
交ヘタルトヲ記シテ、以テ一段ノ說話ヲ終ヘタ
リ、
其後伊弉那岐神ハ南西日本ノ日向ニ歸リ、河水
ニ浴シテ以テ其身ヲ襪被セリ、其際衣服ヲ河岸
ニ投棄シテ之ヨリ新神ヲ化生シ、又其身ノ各部
ヨリ新神ヲ化生セリ、即チ日神(天照大神)ハ其右
眼ヨリ生マレ、月神(月讀命)ハ其左眼ヨリ生マレ、
須佐之男命ハ其鼻ヨリ生マレタリ、而シテ父神
ハ此三子ヲシテ宇宙ヲ統御スルノ權ヲ分掌セ

シメリ、

此處ニ至リテ説話ノ連續ハ夫レ月神ノ事復タ

見エホシテ唯日神ニ係ル説話ト須佐之男神ニ

係ル説話トヲ見ルノミ然レ氏亦此二種ノ説話

ハ互ニ相離開シテ全體ノ神傳ニ矛盾ヲ生スル

者ノ如シ初メ日神ト須佐之男神トノ間ニ激烈

ナル爭論起リ終ニ須佐之男神ハ其姪神ノ天衣

織オリ女ト衣ヲ織ルノ間ニ天服アマノウラハ屋ヤノ頂ヲ穿チテ天

ノ斑馬フナマヲ逆剝ニ剝ギテ墮トシ入レシム是ニ於

テカ不幸ナル成績ヲ生シ日神ハ一時天石屋戸アマノイハヤド

ニ退隱シ八百萬神ヤマトノカミ（日本紀ニ據レハ八百萬神）ハ

辛ウミテ日神ヲ誘惑シテ石屋戸ヨリ出デシム

ルヲ得テ是ニ於テ須佐之男神ヲ放逐シ日神

獨リ宇宙ヲ統御セリ此後日神ハ暫ク説話ニ見

エホ日本（殊ニ出雲）ノ國主タル須佐之男神ト其

子孫トニ係ル説話ヲ見ルノミ是レ神傳ノ最モ

冗長ナル部分ナリ須佐之男神ハ滄海ヲ治ムベ

キノ命ヲ父神ニ受クルト雖モ未ダ曾テ之ヲ治

ムルヲナク初メハ女色ヲ愛シテ所々ヲ徘徊シ

出雲ニ於テ八ヤマト俣遠ヲ呂智ロチ（八岐大蛇）ニ遭遇シ後ニ

ハ黄泉國ノ狡猾醜惡ノ神ト為リテ再現セリ然
レ氏此神日本ヲ統御スルノ權ヲ其六世ノ孫譯
テ曰ク大國^{オホクニ}神^{カミ}即ニ與ヘシヲ視レハ當時尙全ク
現國^{ウツクニ}ヲ治ムルノ權ヲ失ハガリシ者ノ如シ其後
ノ説話ハ全ク此六世ノ孫ニ係リ出雲ノ地ヲ出
デザル者ニシテ初メハ此神ガ素戔^{ヒコウササキ}及ヒ鼠ニ對
シテ談話セシテ黄泉國此段ノ説話ニ載セタル
訪^ヒ奇^キ性^{コト}ナル黄泉國ニ比スレニ在ル其祖須佐之男
命^{ミコト}ヲ訪フノ際智勇ヲ顯ハシタルヲ其婚媾ノ
其八十ノ兄弟ト戰ヒテ勝利ヲ得タルヲ其嫉妬

深キ嫡后ノ心ヲ慰メシテ及ビ其子孫ノ頗ル數
多キ殊ニ理會スベカラザル名稱ヲ負ヘル者多
シトヲ記シ後少^{オホク}名^ナ昆古那^{コノナ}神ノ海上ヲ渡リ此出
雲ノ國主大國主神ヲ輔翼シテ其政治ニ分任セ
シトヲ乞ヒシトヲ記シ而シテ其結尾落着ナキ
者ノ如シ蓋シ此最後ニ記シタル傳説ハ後段ニ
再出スルヲ見ルベシ
日神ノ再ビ現出スルヤ常ニ高御產巢日神古事
記ノ發端ニ載セタル獨化神ノ一ト商議ヒシ者
ノ如シ日神ハ其子ナリヤ將夕其弟須佐之男神

ノ子ナリヤ、未ダ知ラレガル一子譯者曰ク、日神
ノ佩劔ヲ取テ化生シ給ヒニ、日本統御ノ權ヲ
授與セシトノ決心ヲ懷キ、天上ヨリ三名ノ使節
ヲ出雲ニ派遣シテ、其事ヲ整理セシムレト皆其
功ヲ奏セズ、第四ノ使節ヲ派遣スルニ至リテ、始
メテ國王即チ出雲神(大國主神)ヲ降伏セシムル
ノ功ヲ奏シ、是ニ於テカ出雲神ハ全ク其政權ヲ
讓リ、我が為ニ一ノ宮殿ヲ建築シテ、永ク我ヲ祭
ラハ、我亦永ク新朝ニ仕フベシトノ誓言ヲ發シ、
之ニ次テ日神ハ其元ト日本ノ國王タラシメシ

ト欲シタル神ノ子(邇邇藝命)ヲ大地ニ降臨セシ
メタリ、但シ說話ノ連續ニ因リテ考フレハ、北西
ナル出雲ニ降臨スベキノ理ナレト、南西ナル九
洲ノ一山岳ノ頂(高千穂山)ニ降臨セリ、
是ニ於テカ海鼠ノ異形ナル所以ヲ解キタル奇
話ヲ載セ、又人命ノ短折ナル所以ヲ解キタル奇
話ヲ載セ、其後天神(邇邇藝命)ノ三子ノ特殊ナル
境遇ニ在テ生誕セラレシ一說話ヲ載セタリ、此
奇妙ナル說話ハ、火照命、火遠理命、
ト云ヘルニ子
ヲ以テ主ト為シ、火遠理命ガ綿津見神ノ宮ニ到

リシト呪咀ノ術ヲ得テ其兄火照命ニ勝チテ五
百八十羊ノ間高千穗宮ニ安全ニ住居セラレタ
ルト、如月ハ以テ始メ事トス載ヲ麗ハシク
記載セリ、火遠理命ノ子(鶉葦草葦不合命)其姊ヲ
聚リテ四子ヲ生シ、其中一子ハ波ノ穗ヲ踏ミテ
常世國ニ渡リ一子ハ海原ニ入り他ノ二子(五瀨)
命、神武天皇ハ東方ニ進ミテ吉備及ビ倭ノ首長
ト戦ヒ又神ノ尾アル者又ハ尾ナキ者ト戦ヒ神
劔及ビハ咫鳥ノ援ケヲ得又其經歷ノ間偶然事
ニ遭フアレハ之ヲ以テ其地ノ名稱ト為セリ

而シテ此兄弟ノ一人ハ名ヲ神倭伊波禮毘古ト
稱シ日本紀ニ同帝崩御ノ年ト載セタル年ヨリ
千四百年ノ後ニ始メテ神武天皇ノ謚號ヲ得タ
リ、
此後倭及ビ其鄰國ヲ以テ説話ノ趣旨ト為シ出
雲ハ再ビ隱レテ現出セザルガ如シ初メハ頗ル
非禮ナル情話ヲ記シテ以テ神傳ノ二段ヲ接續
スル所ノ橋梁ト為シ次テ出雲ノ舊主(大國主神)
ト同體ナリト云ヘル美和大神此場ニ出頭セリ
但シ此後祭ル所ノ神祇ハ唯此美和大神少名御

神カミ此書ノ第ニ十七段カミ始トメテ此神伊奢沙和氣イササカ大神墨江三水神葛城大神カクキ細カ書第百五十八段載カミリセ夕日神及心倭ノ石上宮ニ藏シタル神劍ニシテ他ニ男神女神ノ記載シタル者ナシ其後神武天皇ノ嗣君（綏靖天皇）ノ御世ノ初ノニ騷動アリシ事ヲ記載シ爾後五百年ノ間ハ全ク事ノ記載スベキ者ナク唯粗畧ナル系圖ト天皇ノ住居セラレシ土地又ハ埋葬セラレシ土地ト其壽トヲ記載スルヲ見ルニ蓋シ是ヨリ先キ歷代ノ神祇又ハ天皇ノ事ハ頗ル之ヲ詳記シタルニ綏靖

以後ニ至リテ其事ヲ略記シタルト是レ殊ニ注目セザルベカラザル所ナリ又古事記ニ據レハ最初ノ十七帝（常說ニ從ヒ）神武天皇ヲ第一ノ天皇ト計ヘノ壽ハ之ヲ平均シテ九十六歳ナレト日本紀ニ載ヒタル通用ノ年表ニ從ヘバ百餘歳ナルト是レ亦注目セザルベカラザル所ナリ但シ天皇ノ壽ノ百二十歳ニ過グル者数人アリ（本ノ附録第二ニ）ヲ参考スベシヲ殆ド五百年ニ亘レル無事ノ年代ヲ過グレハ則チ崇神ノ名ヲ以テ史上ニ知ラレタル天皇ノ御

世ニ至ル此天皇ノ壽ハ百六十八年(日本紀ニ據
レハ百二十歳)ニシテ其御世ハ少シク我耶蘇紀
元ヲ距ルハ崇神天皇ノ御世ニハ出雲ノ舊主
即チ美和大神再ビ現出シテ疫病ヲ流行セシメ
天皇夢ニ此疫病ヲ遏止スベキ方法ヲ教示セラ
レテ終ニ意富多々オホホタ泥古ト云ヘル人ノ美和大神
ノ子ナルヲ知リテ之ヲ美和大神ノ宮殿ノ祭
司ト為シタルヲ記載シ次ノ御世(垂仁ノ世)ニ
ハ神傳ノ上部ニ載セタル如キ荒唐奇恠ノ事ヲ
記載シ又已ムヲ得ズシテ再ビ出雲大神ノ心ヲ

慰メタルヲ帝室ノ内ニ慘刻ナル爭鬪アリシヲ
天皇ノ婚媾ノヲ常世國ヨリ橘ヲ輸入セシヲ
詳記シ終ニ景行天皇ノ子倭建命ヲ以テ主トス
ル所ノ一段ノ說話ニ至ル此說話ハ倭建命ガ其
兄ヲ厠ニ擲殺シタル後西日本及ビ東日本ヲ征
畧スルノ大業ヲ成就シタルヲ記載セリ此說
話ハ歐羅巴人ノ風致ニ適セザル所アレモ全體
ニ就テ之ヲ言ヘバ神傳中ノ最モ感覺ヲ起サシ
ムル所ノ者ニシテ倭建命ガ勇敢ナル大事業ヲ
為シタルヲ女服ヲ着テ強盜ヲ殺戮シタルヲ神

劍及^ヒ火打^ヲ所持シタル^ニ激浪ノ上ニ坐シテ
其風波ノ暴怒ヲ鎮メタル烈婦ヲ妻トセシ^テ邪
神ノ變身ナル鹿又ハ熊ニ出逢ヒシ^テ西方ニ赴
クノ途中未ダ倭ナル其家ニ歸ラズシテ歿セシ
^テ及^ヒ其歿スルノ際ハ尋ノ白鳥ニ化シテ其地
ニ淹留セシ^テヲ記シテ以テ其苟ヲ結ベリ
次ノ御世(成務ノ世)ハ事ノ記載スベキ者ナシ又
次ノ御世(仲哀ノ世)ニ於テハ毫モ讀者ヲ警戒セ
ズシテ天皇ノ宮殿ノ南西日本ノ筑紫ニ在ル^テ
ヲ記シ又四神カ皇后(神功皇后)ノ名ヲ以テ史上

ニ知ラル^ルノ口ヲ藉リテ朝鮮國ノ存在スル^テヲ
天皇ニ告示セシ^テ朝鮮國ヲ載セタルハ此天皇
カ神託ヲ疑ヒ信ヒザルヲ以テ天誅ヲ受ケタル
^テ神功皇后カ其大臣及^ヒ群臣ト詢議シ種々ノ
宗教上ノ儀式ヲ執行シテ船隊ヲ艤シ大小ノ魚
蟹ト波濤ノ援ケヲ藉リテ新羅^{朝鮮古ニ到着シ直}
チニ之ヲ攻畧シテ日本ニ凱旋シタル^ヲ記載
シ又一日皇功カ筑紫ノ小河ノ磯ニ在リテ其裳
ノ糸ヲ抜キ取りテ釣糸ト為シ魚ヲ釣リタル^ヲ
ヲ記載シテ以テ一段ノ說話ヲ終ハリ

次節ニハ神功皇后ガ海路ヲ經テ倭ニ往クテ
載セタリ是レ倭ノ段ト筑紫ノ段トヲ接續スル
所ノ關鍵ナリ但シ日本紀ニ據レハ仲哀天皇ヲ
以テ其御世ノ初メハ倭ニ住居セラレ後ニ筑紫
ニ移居セラレタル者ト為シ此説話ヲ潤色セシ
ト企テタルヲ以テ獨リ日本紀ノ今日ニ存セ
ハ傳説ノニ線ヲ分解スルト頗ル難カルベシ然
ルニ此説話ヲ潤色セザル古事記ノ今日ニ存ス
ルハ學者ノ為ニ幸ナリト云フベシ又神功皇后
ノ兵士ガ皇后ノ義子ナリト云フ所ノニ王子香

坂王忍熊王サカノミコ、オシクマノミコノ兵ト戦ヒテ之ヲ敗リシトヲ載セ
是ヨリ以後ノ説話ハ悉皆一道ノ溝渫ニ流注シ
テ常ニ倭ニ湊合セリ次テ應仁神ノ御世ニ至リテ
ハ始メテ支那ノ事ヲ記載シ又大陸ヨリ書籍ヲ
輸入セシト又種々ノ有用ナル藝術ノ漸々日本
ニ傳ハリシトヲ記載セリ然レ共此御世ハ外國
ヨリ始メテ文明ノ刺衝ヲ受ケタル世ナレハ尚
未ダ神代ノ上部ニ載スルガ如キ荒唐奇恠ノ傳
説ヲ脱却スルト能ハズ其第百十四段ヨリ第百
十六段ニ至ルノ説話ヲ讀ムニ神傳中ノ最モ荒

唐ナル説話ヲ再出シタル者ノ如シ且本書ニ據
レハ天皇(應神)ノ壽ハ百三十歳ニシテ其嗣君(仁
德)ノ壽ハ八十三歳ナリトアレハ日本紀ニ據レ
ハ天皇ノ壽ハ百十歳ニシテ其嗣君在位ノ年ハ
八十七年ナリトアリ矛盾モ亦甚ダシト謂フベ
シ然レハ次ノ御世(仁德ノ世)ニ至リテハ荒唐奇
恠ノ説始メテ消失シ日本紀ニ始之於諸國置國
史記言事達四方志ト記シタル御世皇仲天ト事
實ノ酷ダ相似タル所アリ此時代ハ則チ我第五
世紀ノ初葉ニ相當スルノ時代ニシテ日本紀古

事記ノ編輯アリシ年ヲ距ルハ三百年又名今
日ニ傳ハリタル第一ノ歴史ノ編輯アリシ年ヲ
距ルハ二百年ナリ又古事記ニ於テハ此時代ヨ
リ以後ノ説話ヲ記スルニ事實ノ奇恠ナル所ナ
ク其文体モ亦稍信ヲ置クニ足ルカ如シト雖ハ
説話ノ撰擇其宜キヲ得スニテ二三世ノ間事ヲ
詳記スルノ後ハ唯天皇ノ系圖ノミヲ略記シ終
ニ第七世紀ノ初葉ニ至リテ筆ヲ收メタリ然レ
ハ日本紀ニ於テハ此時代ヨリ以後ノ事ハ頗ル
詳悉ニ之ヲ記シ紀元七百一年(即チ同書編輯ノ

年ノ十九年前(ニ至リテ、始メテ筆ヲ収メタリ、
右ノ略説ヲ讀過シタル者、又ハ自ラ勞ヲ惜マズ
シテ古事記ノ本文ヲ通讀シタル者ハ、必ず神傳
ノ全體ノ一連ニ接續シテ、其間ニ年代ノ罅隙
ルヲ看ザルベシ、又第五世紀ノ初(即チ通例日本
正史ノ初ノト認メタル年ヨリ千餘年以後)ヲ除
クノ外ハ、怪談實説互ニ相錯綜シテ、其間ニ罅隙
アルヲ看ザルベシ、罅隙ト云フベキ者ハ、唯上地
ノ罅隙ノミ、
日本ノ神傳正史ノ互ニ相連續シテ、其間ニ罅隙

アラザルヲハ、日本注釋家ノ十分ニ認識シタル
所ナリ、而シテ今日ノ神道家モ、亦其注釋家ノ説
ヲ以テ正當ナリト思考シ、且一步ヲ進メテ、國史
中ニ登載セル事件ハ、各皆本眞ノ實事ト認ムベ
キ者ナリノ斷案ヲ下シタリ、然レモ人々皆其信
ヲ此ノ如キ狹隘ナル區域内ニ局スルヲ能ハザ
ルヲ以テ、前世紀ノ初メ新井白石ト稱スル有名
ノ著述家アリ、一書ヲ著述シ、我國ノ神傳ハ概シ
テ之ヲ言ヘバ、實録ト看做スベキ者ナレモ、然レ
モ亦比喻寓言ニ過ギザル奇怪ノ説話アリ、且其

神祇ハ其實人名ヲ改メタル者ニ過ギストノ説
ヲ首唱シ之ヲ以テ其心ヲ満足シタリ固ヨリ此
新井氏ノ説ノ中「カミ」(神)ト云ヘル日本語ノ伸縮
スベキ性ヲ説キタル一項ハ好地步ヲ占メタル
者ト云フベキ者アリ然レドモ其解説ヲ通覽ス
ルニ頗ル滑稽戲談ニ近クシテ信スベカラザル
所多シ若シ氏ガ解釋法ニ據ラハ何人ニテモ其
好ム所ノ僻説ヲ證明スルヲ得ベキヤ明カナ
リ

日本ノ言語及ビ傳説ヲ熟知セル讀者ハ新井

白石氏ノ古史通第一卷十三葉乃至二十四葉
ヲ参考シテ以テ氏ガ説ノ柔軟ナルヲ知ルベ
シ氏ノ爰ニ伊邪那岐神、伊邪那美神ノ婚媾ノ
一段ヲ解説スルヤ其趣向極メテ好ケレバ其
之ヲ記スルニ當リテ慇懃懇切ノ心ヲ懷キタ
ル者ニアラザルトヲ保證スベシ

又本世紀ニ至リテ橘守部ト稱スル人同説ノ稍
弱キ者ヲ唱ヘタリ此人ハ本真ノ神道家タルノ
地位ヲ離ル者ニアラザレバ然レバ亦古史中
ノ奇怪ナル事項(鼠ノ談話)ニ説及ビ伊邪那岐

命ノ黒髪が一房ノ蒲萄ノ子ニ化シタル説ノ如キ
ハ、多クハ小兒ヲサナゴト言ト稱シテ、唯其説話ヲ小兒ノ心
ニ銘記セシムルガ為ニ作りタル者ニシテ、天啟
ノ實事トシテ信スベキ者ニアラズ、今日ノ大人
ハ之ヲ信條ト看做スベキ者ニアラズト云ヒテ、
古事記ノ本文ニ載スル所ノ各個ノ事實ヲ以テ
一々本真ノ事實ト看做ス所ノ本居氏ノ説ヲ辨
駁シ、又古事記ノ章句中ニ、支那ノ感化ヲ受ケタ
ル痕跡ノ見ユベキ者アルヲモ許認セリ、又當
代ノ耶蘇教著述家高橋五郎氏ノ如キモ、日本神

傳ノ明理信者ト稱スベキ一派ニ属スル者ト看
做サルヲ得ズ、高橋氏ハ新井白石ノ轍ヲ陷ミ、
且外國ノ神傳ヲ以テ自國ノ傳説ヲ解説シ、例ヘ
ハ日、神ノ説及ヒ山田ノハヤ侯アタ遠ロ呂チ智ノ説ヲ解釋
スルニハ、昔シ日ト名ツケタル女王ニ行景ノ弟ア
リ、此弟女王ノ領地ヨリ竄論セラレシ後、遠ロ呂チ智
蛇ト名ツケタル敵ヲ殺シタルニ過ギスト云フ
ヲ以テシ、又出雲ヲ統御スルノ權ヲ分タシト、彼
ノ穗ヲ踏ミテ來リシ少スガ名ナ毘ビ古コ那ナ神ノ、其名ヲ言
フヲ能ハザリシ説話ヲ解釋スルニハ、此神ハ外

國人タリシヲ以テ、一時言語ヲ理解スルヲ能ハ
ザリシニ過ギスト云フヲ以テセリ、此種ノ論理
家ヲ觀ルニ、一方ニテハ其說ヲ支持セントスル
モ、又一方ニテハ其說ヲ撲滅スル者ニシテ、畢竟
自己ノ想像ヲ以テ、議論ノ本位ト為スニ過ギズ、
然ルニ高橋氏ノ如キハ、毫モ之ニ注意セズシテ、
我解説ハ毫モ牽強附會ノ說ニアラズ、又想像ノ
說ニアラズ、我解説ハ必ズヤ疑惑者中ノ最モ甚
ダシキ者ノ疑惑ヲ氷解セシムベシト夸言セシ
ト、奇恠ナリト謂フベシ、
爰高橋氏引用神道新論ナ書ハ

今日日本人ノ稍、狐疑スル者、即チ文字アル者百
中ノ九十九ノ一般ノ慣習ハ、神武天皇以下ノ歴
史ヲ盲信シテ實事ナリトシ、而シテ神代ノ記録
ヲ棄捨シテ取ラザル者ノ如シ、歐羅巴人モ亦思
慮ヲ加ヘズシテ只管此慣習ニ倣ヒ、曆書ナリ、辞
書ナリ、歴史ナリ、其編輯ノ書ヲ視ルニ、皆「ケムア
ズル」氏「チツチシグ」氏ノ如キ陳腐ナル記者ノ說
ニ雷同シテ、日本ニハ二千年以上ニ亘レル正史
アリト云ヒ、「シールホルト」氏「ホツフマン」氏ノ如キ
ハ、紀元前六百六十年神武天皇即位ノ時刻マデ

モ、叟々之ヲ辨論スルノ甚ダシキニ至レリ、日本ノ政府モ亦現ニ此意匠ヲ認許シ、其學校ノ教科書トシテ用ヒタル歴史ヲ觀ルニ、神代ハ說話(即チ神武以上ノ日本傳説)ノ如キハ、或ハ之ヲ忽諸ニ附シ、或ハ之ヲニ三章ニ記シタレド、人皇ノ記(即チ神武以下ノ日本傳説)ニ至リテハ、恰モ其事昨日ニ起リテ、世上ニ其證據アリテ疑ヲ容ルベカラサル實事ノ如クニ詳記セリ、此他亦官板ノ書ニ同一ノ意匠ヲ述ベタル者アリ、今其一例トシテ日本政府ヨリ派遣セシ維也納博覽會委員

ノ著述ニ係ル日本帝國報告ヲ引用スルヲ左ノ如シ、曰ク
我朝ノ歴史ハ、其淵源頗ル遠ク、其端緒頗ル曖昧ニシテ、典籍ノ正確ナル者ナク、又曆書ノ完全ナル者ナシ、我朝初代ノ天皇ハ、神武天皇ニシテ、此時ヨリ年紀ニ信ヲ置クベキ者トス、此天皇ハ日向國ニ於テ兵ヲ擧ゲ、兵士ヲ率井テ東ニ進ミ、大和ノ橿原ノ谷ニ都ヲ奠メ、終ニ皇帝ノ位ニ登レリ、今現ニ日本ヲ治ムル王室ハ、此天皇ノ子孫ニシテ、其系統連綿トシテ絶エ

ガル所ナリ、又日本ノ紀元ハ、此天皇ノ即位ノ
年ヨリ始マレリ、(紀元一年ハ、耶穌生前六百六
十年ニ當ル)

今此委員ノ報告ニ記載セル日本ノ紀元ニ就テ、
一言スベキトアリ、此紀元ハ千七百七十二年十
二月十五日(明治五年十一月十五日)ノ布告ヲ以
テ、始メテ日本ニ行ヒタル者ニシテ、其日ハ恰モ
博覽會委員ノ報告書ヲ出版セシ十四日以前ニ
相當セリ、而シテ又此紀元(即チ神武天皇即位ノ
元年)ハ日本ノ歴史ノ編輯アリシ年ヲ距ルト千

三〇百年、著作術ノ日本ニ傳ハリシ年ヲ距ルト九
百〇年ニシテ、且只奇恠ナル傳説ヲ滿載シタル書
籍ヲ證トシテ立テタル者ニ過ギザルナリ、試ニ
ニ問フ、此ノ如キ精細ナル言語ヲ以テ日本ノ紀
元ヲ評シタル後、再ビ之ガ評語ヲ下ダス、トヲ要
スルカ、公平無私ノ人ニシテ尚日本上古ノ年紀
及ビ日本紀ノ始メノ千年ヲ信認スルカ、今此議
論ヲ去リテ、古事記及ビ日本紀ノ紙葉中ヨリ古
代日本ノ宗教政治ノ情態ニ係ル知識ヲ得ベキ
ヤ否ヤニ論及セザルベカラス、抑、此知識ノ断片

ニ二種アリ、即チ一ハ正筆ノ断片ニシテ、意義明瞭疑ヲ容レザル者、一ハ及筆ノ断片ニシテ、議論推断ノ資料ニ供スベキ者、是ナリ、今先ツ正筆ノ断片、即チ天地開闢ノ思想、夢、祈禱等ノ説ヨリ、陳述セントス、

第一ニ學者ニ感覺ヲ起サシムル者ハ、古代日本ノ宗教ハ、(適當ナル名稱ナキヲ以テ、古代日本ノ宗教ト稱セザルヲ得ズ) 宗教ノ体裁ヲ為ス者ニアラザルヲ、是ナリ、熟、佛教、耶蘇教及ヒ回々教ノ如キ文明ノ宗教ヲ視察スルニ、信條ノ体裁ヲ為

シタル者、修身ノ規則、及ヒ嚴ニ此二者ヲ守ラシムル所ノ聖書アレハ、日本ノ宗教ニハ、之アルヲ看ス、日本ノ宗教ハ同等ニ列ビタル教法ニアラズシテ、雜駁ナル謬信ノ一把ナルヲ看ルノミ、夢ハ未來ノ事ヲ前言シ、神祇ノ意ヲ告グル者ト為シテ、頗ル之ヲ貴重セリ、時アリテ神劍ノ如キ實物ノ、夢中ニ降ルヲアリ、但シ此事タル、余輩ヲ以テ考フレハ、有形ト無形ト混合スル者ニ似タリト雖、氏、古代ノ日本人ハ、此ノ如キ觀ヲ為サズ、唯余輩ガ自然ノ秩序ト稱スル所ノ顯象、一秩序

アルトヲ知リテ、無形ノ顯象ノ一秩序アルトヲ
知ラザリシナリ、又天ハ大地ト同ジク實物ニシ
テ、死後受福者ノ住所ニモアラス、唯日本ノ上ニ
在リテ、槁梁若シクハ階梯ニ因リテ日本ト通ジ、
神ト稱スル勢カアル人物ノ居住スル高原ナリ、
大地ヨリ矢ヲ射ル時ハ、其矢天ニ達シテ之ヲ穿
ツトヲ得ベシ、又天上ニハ山岳少クモ一アリ、又
江河一アリ、此河ノ底ハ廣濶ニシテ砂礫多ク、日
本ノ遊歷者ノ熟知スル所ノ者ニ似タリ、又岩窟
一ニアリ、又井、動物及ビ植物一ニアリ、然レモ有

名ナル香山ノ如キニ至リテハ、倭^{ヤマト}此名ノ山アル
カ故ニ、天上ニ在ル者ナリヤ、将タ地上ニ在ル者
ナリヤ、未ダ知ルベカラズ、
神ニ始メヨリ大地ニ住ミ、或ハ天上ヨリ大地ニ
降り、人間ノ女子ト婚媾シテ兒女ヲ生ミシ者アリ、
例ヘハ神武天皇ノ曾祖父^{ニギハヤヒ}、^{ニギハヤヒ}命ノ如キ是
ナリ、又神ニ尾アル者或ハ異形ノ者アリ、又神代
ノ頃ヨリ人皇ノ御世ノ間、^{（通用ノ年表ニ從ヘハ、}
第一世紀第二世紀ニ相當スル時代迄、日本ノ或
ル部分ニ惡神^{アスルカミ}ノ住ミシトヲ屢、記載セリ、又人皇

ニシテ時アリテハ神號ヲ附與セラレ又自ラ稱
シテ神ト曰ヒシトアリ又神祇ノ中ニ時々身ノ
動物ニ變化スル者往々之アリ又唯觸知スベキ
單一ナル物(伊邪那岐命が其敵兵ヲ撃ツニ用ヒ
タル桃實)ニ神號ヲ附スルト往々之アリ蓋シ神
ト云ヘル語ハ前文ニモ陳述ヒシガ如ク唯尊長
ト云フノ意義ニ過ギザル者ナレバ古代ノ日本
人が單一ナル天然物ニ神號ヲ附シタル時
deity ^{ダイテイ}ノ英語ヲ以テ之ヲ譯スルハ大ニ原語ノ
意義ニ乖戾スル所アリ古代ノ日本人ハ元來想

像ノ極端ニ走ルノ資質ヲ父キ又古代日本語ニ
ハ物ヲ假リテ人ト為スノ慣習ヲ父ク者ナルニ
此譯語ヲ讀ム者ハ却テ日本人ノ此資質ヲ有シ
日本語ノ此慣習ヲ有スルトヲ誤解スベシ又古
事記中ニハ二三ノ神ヲ合稱シテ五月ノ蠅ニ等
シキ邪神ト記載シタル所アレ氏判然ト善神邪
神ノ區別ヲ立テタル所アルヲ看ス上古日本ノ
神祇ハ希臘ノ神祇ノ如ク唯人類中ノ勢力アル
者ニ過ギス且人ト同ヒク生死アリ然レ氏神祇
中ニハ其死スルト同時ニ其生命ノ全ク絶エシ

が如ク見ユル者アリ、或ハ又其命ノ全ク絶エタ
ルニアラサシテ、唯ヨモツク黄泉國又ハ所謂トチル一道ハ黄
泉國ト云フ、ナル者ニ轉移シタルニ過ギザルガ
如クニ見ユル者アリ、或ハ毫モ死去ノ事ナクシ
テ、黄泉國ニ赴キシガ如ク見ユル者アリ、實ニ此
數項ノ如キハ、矛盾中ノ尤モ甚ダシキ者ト謂ハ
ザルヲ得ザルナリ、

黄泉國ノ如キモ、亦此矛盾ノ一例ナリ、例ハ大
國主神ノ傳説出雲ノニ載スル所ヲ見レハ、黄泉
國ハ、恰モ生命アル者ノ住處ノ如ク、或ハ又恰モ

天同物ノ如クニシテ、(但ニ)黄泉國ヲ以テ、天ト同物
ナリトスルモ、亦等シク生命アル者ノ住處ト為
サバルヲ得ズ、而シテ樹木モアリ、家屋モアリ、家
族ノ争鬪モアリシト云ヒ、伊邪那岐命ノ傳説ニ
載スル所ヲ見レハ、黄泉國ハ唯厭フベキ腐敗ノ
地、悪ムベキ屍骸ノ地ニシテ、此國ニ往キタル神
ハ、自ラ之ヲ評シテ、伊邪イナ志許米シメ岐キ穢國ト
云ヒ、兩傳説全ク相反セリ、兩傳説ノ符合スル所
ハ、唯現國ト黄泉國トノ間ニ、黄泉比良坂ト名ツ
クル界標ヲ置クノ一事ノミ、又書中何レノ處ニ

モ死者ノ情態ヲ記載セズ、又死ニ臨ミタル者ガ
曾テ來世ニ就キテ其善惡ヲ述ベタルトアルヲ
記載セズ、

古代日本人ノ祭ル所ノ者ハ、固ヨリ群神ニシテ、
他ノ者ニアラス、又前文ニモ陳述セシガ如ク、神
傳ノ後部ノ專ラ地上ニ係ル^段於テ、其祭ル所ノ神
ハ、唯日神、伊奢沙和氣大神、石上神、劍少名御神、及
心葛城大神、及心墨江三水神ノミニシテ、此中日
神ト墨江三水神ハ、常ニ相ヒ伴ヒ並ヒ現ハル、
ト雖、凡他ノ五神ハ、獨自ニ出現シテ、互ニ相陪伴

セサリシ者ノ如シ、又山神、河神、海神等ハ、之ヲ合
祭スルト、天神地祇ヲ合祭スルガ如クシ、而シテ
神功皇后ハ、朝鮮ヲ遠征スル以前ニ、眞木灰納瓠^{マキノコ}
亦著^{マシト}及比羅傳^{ヒラテ}多作^{タツク}皆皆散^{チラシ}浮^{ウケ}大海^{オホウミ}テ、以テ諸神ノ
心ヲ和解シタリト記載ヒリ、

宗教儀式ノ趣旨ニ就キテハ、原書ニ載スル所甚ダ
粗畧ナレバ、其詳細ヲ知ラント要セバ、他書ニ就
キテ参考セザルベカラズ、本書第二十^六段^及其^三説
話^ノ大畧^スベシ、但シ今引用シタル詞句ヲ推シテ考
フレバ、神祇ノ心ヲ和解スルガ爲ニ供シタル祭

物ハ種々ノ物品ヨリ成ルヲ知ルベシ然レ氏
平生人民ハ其最モ貴重スル所ノ物品ヲ用ヒテ
神ヲ祭リシ者ノ如シ夫ノ歌人貫之ガ晩年海中
ニテ風波ノ難ニ逢ヒタル時唯一面ノ鏡ヲ携ヘ
タルヲ以テ之ヲ波濤ニ投棄セシガ如キハ則チ
此一例ナリ又日本人ハ古代神ヲ祭ルニ二種ノ
布(一種ハ麻布一種ハ穀樹(楮)ノ皮ヲ以テ製シタ
ル布)ヲ用ヒ頗ル之ヲ貴重セシガ近世ニ至リテ
ハ更ニ其品價ヲ卑賤ニシ紙片ヲ以テ布ニ代ヘ
之ヲ以テ神ヲ祭レリ又盾矛ノ如キモ古代ノ人

民ガ神ヲ祭ルニ用ヒタル者ナリ又神祇及ヒ死
者ヲ祭ルニ食物ヲ供獻スルヲ古代人民ノ常例ナ
リ但シ日本ニ於テハ崩御セラレシ天皇ノ宮殿
(即チ陵墓)ト神祇ノ宮殿トハ其様式全ク同一ニ
シテ彼此區別スルヲ能ハス且前文ニモ陳セシ
ガ如ク日本語ニテハ此二者ヲ稱シテ共ニ「ミヤ
(御屋)ト名ツクト雖氏余輩之ヲ翻譯スルニ及シ
テハ崩御セラレタル天皇ノ宮殿ト神祇ノ宮殿
トノ譯字ヲ區別ヒザルベカラザルヲハ無論ナ
リ

古事記ニハ、一處ヲ除クノ外、第三十二段ノ末祈禱ノ詞ヲ記載セズ、又神ト談話スルヲ記載シタレ氏、神ヲ祭ルノ言辭ヲ記載セズ、然レ氏幸ニシテ他書ニ甚ダ舊キ祈禱文數篇(祝詞)ヲ載セ、「サトウ」氏ハ既ニ其ニ三篇ヲ翻譯シテ、之ヲ本會事務録ノ諸冊子中ニ登載シタリ、今其祈禱文ヲ看ルニ、大抵皆神恩ヲ得タルヲ鳴謝シ、又ハ神恩ヲ得シトテ願望シテ、稱讚ノ言辭ヲ排列シ、奉獻ノ物品ヲ列記スルヲ以テ趣旨トシ、而シテ其文体ハ悉皆散文體ニシテ、詩歌體ニアラザルヲ看ル、然レ氏

古事記中ニハ、百十一首ノ歌ヲ載セタレ氏、一トシテ此ノ如キ宗教ニ關係スルノ歌アルヲ看ザルナリ、又書中ニ屢、記載スル所ノ神聖ナル儀式ハ、水ヲ以テ禊祓スルヲアリ、又湯ヲ用ヒテ詞訟ヲ裁決スルヲ記載シタレ氏、大陸ト交際ヲ開キシ後ニ至ル迄、此事アリシヲ聞カズ、又我歐羅巴ニ行ハレシ誓願、祈誓、呪咀ニ似テ、神ト契約ヲ結ビシヲ、聞之アリ、又神官ノ事ヲ載セタル所ニ三章アル氏、之ヲ詳記シタル所ナシ、又上古神官ノ職掌

ル神ト人トノ間ニ在リテ、和解ヲ司ル者ニアラ
ズ、又一品族ヲ為ス者ニアラス、後世官職ヲ子孫
ニ世襲セシメ、神官ノ職掌モ亦之ヲ子孫ニ世襲
セシムルノ風習行ハル、ニ及シテ、神官始メテ
一品族ヲ為セリ、

古事記及ヒ日本紀ニハ、種々ノ謬信處々ニ挿入
セリ、而シテ此謬信ハ傳記ノ今ノ体裁ニ整頓セ
シ時、既ニ陳腐ニ屬シテ理解スベカラザル者ト
ナリタリト見エテ、書中ニ一々其由來ヲ記載セ
リ、例ヘル古事記及ヒ日本紀中ニ只一個ノ光ヲ

點シ、又ハ夜中櫛ノ齒ヲ牽キ折リ、又ハ蓑笠ヲ着
シテ人家ニ入ルノ不祥ナル所以ヲ記載シタ
ルガ如キ是ナリ、又日輪ニ對ヒテ往クノ不祥
ハ、神武天皇ノ傳説ニモ、又他處ニモ之ヲ記載セ
リ、

神武天皇ノ傳説ニハ、日輪ノ往ク道ニ反對シ
テ西ヨリ東ニ往クノ不祥ナリトスル所ノ
謬信ヲ載セタリ、然レモ本書第一百五十三段ニ
於テ雄略天皇ハ日輪ヲ背ニ帯ビテ東ヨリ西
ニ往キシガ為ニ事ヲ過テリト記載セリ、今此

二種ノ謬信ハ、柄鑿相容レザル者ノ如シト雖
凡其實一義ニ歸スル者ナリ、何トナレハ不祥
ノ係ル處ハ日ニ對カフニ在リテ、其對フト云ハ
ル義所ニヨリテ異ナレバナリ

符咒ノ事モ亦屢之ヲ書中ニ記載セリ、例ヘハ須

佐之男神が大蛇ノ尾中ヨリ發見シテ、今尚帝室

ノ神器ト為ス所ノ草那藝劍、神武天皇ノ祖父火

遠理命ガ其兄ト爭フニ用ヒテ勝ヲ得シ所ノ鹽

盈珠、鹽乾珠及ヒ同ジ傳説中ニ著ルク顯ハル、
所ノ釣ノ如キ、則チ是ナリ、本書ノ第三十九段ヲ参考ス

段及ヒ、又草那藝劍ニ就テハ、本書ノ第十八又神ノ
意志ヲ知ルニハ、常ニ鹿ノ肩骨ヲ以テ占フノ法

ヲ用ヒ、人ト雖凡亦幾分カ未來ノ事ヲ豫言スル

ノカアルヲ記載セリ、又旅行ヲ企ツル時ハ、其

發足スル所ノ地ニ土壺ヲ埋メ、戰爭ノ時ハ、始メ

テ射ル所ノ矢ヲ以テ、尤モ警戒ヲ加フベキ者ト

看做シタリ、夫ノ神功皇后ガ朝鮮ヲ征伐セシ時

尤モ其發途ニ警戒ヲ加ヘタリシトハ、既ニ前文

ニ記載セシ所ナリ、實ニ何等ノ事業ヲ企ツルニ

モ尤モ其始メテ謹慎セシ者ノ如シ

今古代日本人ノ宗教ノ思想ニ係ル此畧説ヲ終
尾ニ臨ミテ前文藝術産物ノ場合ニ於ケルガ如
ク宗教思想ノ古代ニ缺乏セル所ノ者ヲ擧ゲテ
記載セザルベカラズ、讀者ハ須ク先ツ古代日本
ニハ洪水ノ傳説ナキ、地震ノ災ノ為ニ人民ノ
想像ノ上ニ影響ヲ及ホシタル証據ナキ、星辰
ヲ祭リシ痕跡ナキ、上帝作人ノ教及ヒ輪廻ノ
教ナキ、**ニ**注意スベシ、蓋シ上帝作人ノ教及ヒ
輪廻ノ教ナキヲ見レバ日本ノ神傳ハ佛教ノ友
響ノ日本ニ波及セザリシ以前ニ今ノ体裁ニ整

頓シタルヲ徴證スベシ、又何レノ國ニテモ洪
水ノ屢起リ其影響ヲ人民ノ想像ニ及ホシタル
ヲアルニ日本ニ此事アルヲ見ザルハ奇恠ト謂
フベシ、又輓近余輩ノ所謂ル大洪水即チ旧約全
書ニ記セル大洪水指ナル者ヲ評シテ古代「アルタイク」人
種ノ製作シタル小説ヨリ出デタル者ナリト云
フ者アルニ然レバ「アルタイク」人種中ノ最モ舊
キ者ト稱スベキ日本人傳説中ニ此種ノ小説ヲ
載スルヲ見ザルハ亦奇恠ト謂フベシ、又他國ノ
人種ハ其想像ノ心ヲ逞クシテ星宿ノ名稱ノ周

因ニ空想ヲ附貼シタレ氏日本人ハ古今ノ別ナ
ク其事ヲ忽諸ニ附シ正史年代ノ頃星宿ノ名称
ト星宿ニ係ルニ三ノ傳説ト支那ヨリ傳ヘタ
レ氏星宿ヲ以テ「蒼天ノ歌曲」ト看做スノ思想ヲ
モ懐カザリシハ是レ亦奇怪ト云フベシ此他亦記
載スベキハ許多ノ國ニ於テハ七ノ數ヲ以テ神
聖ナル者ト爲シ之ヲ貴重シタレ氏日本ニ於テ
ハ此數ヲ貴重セスシテ却テ八ノ數ヲ貴重セシ
一項ナリ例ヘバ大八島國ハ倭遠呂智ハ拳須八
千矛神チホコノカミ八十萬神ヨロツノカミ或ハ八百萬神等ノ如キハ註釋

家ノ言ニ據リテ之ヲ解スレバ此八又ハ八十ノ
數ハ字義ノ儘ニ解スベキ者ニアラス只員數ノ
多キヲ形容シテ名ツケタル者ナリト云ヘリ然
レ氏余輩ノ考案ニ據レバ其理ハ固ヨリ知ルベ
カラザレ氏殊ニ八ノ數ヲ貴重セシテ明カナリ
且同じ古事記ニシテ八ノ數ヲ載スルノ外又十
十一ノ數ヲ載セ且大八島國ノ如キ場合ニ於テ
ハ各一個々々ヲモ列擧シタリ是ニ由テ之ヲ觀
レバ古代日本人ノハト云ヘルハ恰モ余輩ノ

セーサン トロント
Seven, Twenty, Seven, hundred

ト云へルが如クニシテ、或ハ只員數ノ多キヲ形
容シテ用ヒタル所モ間之アリト雖、亦多クハ
八個ノ意義ヲ示スニ用ヒタルト明カナリ、
右ニ説述シタル所ト、近世歐羅巴ノ記者ガ神道
ニ就キテ述ベタル想像説トヲ比較スレバ、其間
ニ霄壤ノ差違アルト是レ細説ヲ要セザル所ナ
リ、例へバ「サル、エドワルド、リード」氏ノ著書ニ引
用シタル「ビズラ、レゼンド」氏ノ言ニ曰ク、
神道者ノ説ニ據レバ、好生ノ精靈^霊アリテ宇宙
間ニ充滿シ、天地間ノ各物之ニ感ヒテ受胎ス

ルヲ以テ、各物皆神ノ寄寓スル所トナリ、各地
到ル所トシテ、男神若シクハ女神ヲ祭ラザル
ハナク、其員數ノ増益スルト際限ナシト、又神
道者ハ古代ノ羅馬人希臘人ノ如ク、元始無上
全能ノ上帝ヲ信仰シ、此上帝ハ草昧野蠻ノ風
俗ヲ改良シテ精美華麗ノ風俗ニ移ラシメ、且
男女ノ特權アル者ヲ經由シテ、人ニ教フルニ
今世ノ幸福ヲ増進シ、死後ノ冀望ヲ高クスル
トヲ以テセリト、
此ニ引用スル所ハ、唯夥多ナル無根ノ想像説中

ノ其一ニ過キ不然レ此一説ヲ聽ク人ト雖レ
今ノ第十九世ハ神傳製作ノ時代ノ一部分ニ屬
セザルヲ得ストノ謬信ヲ懷クニ至ラント必セ
リ
政事ノ趣旨ニ就キテハ知ル所甚ク少ナシ唯出
雲國ヲ統御スルノ權ヲ八十ノ兄弟ヨリ讓與シ
タルト又伊弉那岐神ガ宇宙ヲ統御スルノ權ヲ
其三子ニ分任シ一子ニ高天原ヲ與ヘ又一子ニ夜
見國ヲ與ヘ又一子ニ海原ヲ與ヘタルトヲ泛然
記載スルノミ然レ此上古ノ傳説ヲ推シ考フル

ニ此種ノ統御權ハ實地ニ之ヲ行ヒシニハアラ
ズ天神相集合シテ一種ノ共和政治ヲ設立シ天
河ノ原ニ會議シ其議員中ノ最モ賢明ナル者ノ
忠告ヲ取りテ以テ大事ヲ裁断セシ者ノ如シ而
シテ古事記及セ日本紀ノ說話ニ載スル所ノ種
々ノ神會ハ恰モ各國草昧ノ時ニ於テ人民ガ村
會ヲ建立シ一人ノ賢明ナル者説ヲ述ブレバ衆
人一般ニ只管其説ニ從順セシ者ト同一般ニシ
テ後世一定セル制度ヲ立ツルニ及ンテ此風始
メテ廢セリ

天上ヨリ大地ニ降りテ之ヲ言フニ所謂ル神代ノ頃ニハ唯孤立セル人物及ビ家族ニ係ルノ説話ヲ見ルノミ其後天皇戦争ノ説話ヲ始ムルニ及ンデ政體制度ノ如キ者始メテ顯ハレ各地方ノ酋長其兵士ヲ牽引テ戦争ヲ為シ各其掌大ノ領地内ニ於テ全權ヲ擅ニスルヲ見タリ是ニ據レハ當時ノ政體專制政治ニ似タリ然レモ神武天皇ノ傳説ヲ讀ミテ天皇及ビ其兄ノ相並ビテ其兵士ヲ指揮シ其兄ノ没セラレニ至リテ天皇始メテ其全權ヲ握リシヲ見筑紫人種ノ政

治ノ體裁ハ專制政治ニアラザル者ノ如シ又神武天皇及ビ其嗣君ノ世ニ臣屬セル倭ノ縣主及ビ出雲ノ國造クニミヤツクノ常ニ一人ノ如クニ記載セラレズシテ數人ノ如クニ記載セラルヲ見レバ其縣主其國造ハ各皆一人ニテ其權柄ヲ擅ニセシ者ニアラザルガ如シ又所謂ル人代ノ頃日本ニハ天皇ノ直轄ニ屬セル國ト甚々其直轄ニ屬セザリシ國トアリテ其地方官ノ縣主國造連等ノ名ヲ負ヒタルヲ見レバ當時ノ天皇ハ直接ニ日本ノ各部ヲ統轄セシ者ニアラズ或ル地方ニ於

テハ、其首長外ハ倭ノ天皇ニ忠節ヲ致シテ内ハ其領地ノ統轄シ又或ル地方ニ於テハ天皇ヨリ其親戚或ハ家臣ヲ派遣シテ酋長ニ代ハラシメ其親戚其家臣ハ舊地方官ノ負ヒタル名稱ニ同シキ者ヲ負ヒ其領地内ニ於テ無上ノ權柄ヲ振ビ之ヲ要スルニ當時ノ政體ハ中央集權縣郡ニモアラズ又專制政治ニモアラズ全ク封建政治ナリシガ如シ抑右ニ述ベタル古代日本ノ政治ノ殊性ハ日本ノ註釋家ト雖凡全ク之ヲ知ラザルニアラズ神道家ノ巨擘タル平田氏ノ如キハ既

ニ此事實ヲ認識セシノミナラズ尚且一步ヲ進メ第八世紀ヨリ第九第十第十一世紀ヲ經テ第十二世紀ノ央ニ至ル迄行ハレ今日ニ再興シタル中央集權ノ制度ハ只是レ支那ノ專制政治ヲ模擬シタル者ニシテ日本古代ノ真正ナル政體ニアラズ第十二世紀ヨリ千八百六十七年ニ至ル迄行ハレタル整頓セル封建政治コソ古代ノ政體ナリト陳述セリ今余輩ノ考究スル所ニ據ルハ上古ノ世ニ於テハ中世ニ行ハレタル錯雜セル政治ノ如キ者ノ行ハレタルヲ看スト雖

氏天皇ノ直轄地ヲ出ツレハ其政体中央集權ニ似カシテ却テ封建政治ニ似タルハ是レ誣フベカラザルノ説ナリ然リ而シテ第七世紀ノ頃日本ノ政体俄然專制政治ニ變ジ此時マテ地方酋長ノ負ビタル名稱ハ或ハ之ヲ剝奪シ或ハ之ヲ尸^{カネ}ニ改メテ有名無實ノ稱號ト爲シタルハ是レ亦疑ヲ容レザル所ナリ又上古ノ世ニ於テ天皇繼嗣頗ル次序ナカリレテ第六世紀ニ至テモ尚奇異ナル繼嗣ノ缺欠(空位)ヲ生ジタルハ天皇ノ位ヲ嗣グベキ者ヲ皇子中ニ撰ム時嫡子ヲ撰ン

テ之ヲ立ツルノ甚ダ稀ナリレテハ是レ又古史ニ徴シテ知ル所ナリ
余輩ハ古代日本ノ傳説ヲ載セタルニ書ヲ講究シテ其宗教政治ノ思想ヲ解剖スルヲ得タリ今又此解剖シタル所ノ者ニ據リテ日本ノ尚一層舊キ歴史人種ノ區別及ビ日本傳説ノ淵源ヲ推知スルヲ得タリヤ否ヤト問フニ余輩ノ所見ヲ以テ之ヲ言ヘハニ三ノ緊要ナル臆説ヲ推知スルヲ得タリト答ヘザルヲ得不然レ氏此説ハ固ヨリ臆説ニシテ確説ニハアテザルナ

抑、古事記、日本紀ヲ讀ミテ、其神祇ノ數多クシテ
其傳説ノ錯綜複雑セルヲ見レハ、第三世紀ノ頃
亞細亞ノ大陸ト交際ヲ開クニ至ル迄、日本文明
ノ發達ハ、只一線ニ流動セシ者ニアラズトノ説
ヲ唱ヘザルコトヲ得ズ、而シテ余輩ガ此説ヲ唱フ
ル所以ノ者ハ、獨リ論理上ノ思考ノ推スベキ者
アルノミニアラズ、尚事實ノ徵證スベキ者アル
ヲ以テナリ、抑、歴史ノ初メヨリ、日本ノ傳説ノ運
期ニ三中心、三大河アリ、而シテ第五世記ニ至リ

テ、此三中心、三大河互ニ相混合シ、日本國ヲ形成
シテ以テ正史ノ端緒ヲ開ケリ、此三中心ノ第一
ヲ出雲トシ、^{イッモ}神傳中最モ緊要ナル者、第二ヲ倭ト
シ、第三ヲ筑紫^{ソクシ}、近世之ヲ九州ト曰フ、トス、而シテ
日本ノ東部及ビ北部ハ、此内ニ入ラズ、實ニ日本
ノ北東及ビ北部ハ、近年ニ至ル迄野蠻ナル「アイ
ノ人」ノ居住スル所ニシテ、日本人ハ此人種ヲ稱
シテ「エミシ」^{エビス}又ハ「エソ」ト云ヒシナリ、又此
三中心ヨリ發生シタル傳説ノ各、昭合一致セザ
ル所アルヲ見レハ、日本ハ古代數個ノ獨立國ニ

分レタリトノ説ヲ唱ヘザルヲ得ズ是レ既ニ
上文ニモ略説シタル所ニシテ今後日本ノ傳説
及ヒ思想ヲ解剖シテ三大中心ニ整頓セハ益其
明證ヲ得ルヲアルベシト思惟スル所ナリ然レ
氏此説ハ唯ニ臆想ノ説タルノミニアラス其證
左ノ在ルアリ山海經ニ北倭ト南倭トノ事ヲ明
記セリ又支那ノ西漢書ニ日本國ハ數多ノ王國
ニ分レタリト記シ又後漢書ニ其最モ強キ者ハ
邪馬臺トナリト記セリ又後世支那ノ史官ハ日本
ト倭トハ各別國ニシテ日本ハ曾テ倭ヲ併吞セ

シトアリト記載セリ但シ此記者ノ所謂ル日本
ハ筑紫島又ハ其島ノ一部分ヲ指シテ云ハル
明カナリ又支那ノ古書中ニ東北山岳ノ外ニ毛
人國アリト又アイノヲ云フト記載シタル
所一二處アルヲ見レハ亦以テ古代支那人ノ略
能ク日本ヲ知リタルヲ證スベシ但シ支那ノ
書ニ出雲ノ別國タルヲ記載シタルヲ看ズ故
ニ出雲ノ別國タルトニ至リテハ全ク其證據ナ
シト云ハザルヲ得ズ固ヨリ倭カ筑紫人(日本人)
ニ併吞セラレザリシ以前ニ出雲ノ倭ニ併吞セ

ラレタルトモアルベケレ氏古書中ニハ倭ガ出
雲ヲ併吞セシ傳説ト筑紫ガ倭ヲ併吞セシ傳説
ト相混淆シテ別カレザルヲ以テ之ヲ明ラムル
トヲ得ザルナリ又出雲ヲ以テ別國ト看做スニ
アラザレハ出雲ガ特殊ノ地位ヲ神傳ニ占メタ
ル所以ヲ説明スルト能ハザレ氏傳説ヲ正史ニ
改造スルトハ殆ト企テ難キ事業ナルガ故ニ到
底其確實ナル證據ヲ得ルト能ハザルナリ之ヲ
要スルニ此曖昧糺糊タル問題ニ就キテ今後何
等ノ明證ヲ得ルトアルニモ拘ラズ日本ノ正史

ノ最モ高キ限界ハ紀元四百年(履仲天皇ノ御世)
ニ在リテ而シテ此年紀ヨリ以上ハ荒唐奇恠ノ
説甚ダ多クシテ信ニ難キヲ記憶セザルベカ
ラス然ラハ則チ余輩ノ如ク日本古代ノ實事ヲ
古事記及ビ日本紀中ニ探ラント欲スル者ハ只
其文中ニ載スル所ノ事績ヲ拾集スルヲ以テ足
レリトセシテ亦之ヲ淘汰シ之ヲ拔萃セザル
ベカラザルト言ヲ待タザルナリ
又上文ニ説クガ如ク日本ノ傳説ヲ以テ錯綜複雑セ
ル者トスレハ余輩ハ其傳説中ノ想像ノ部分ノ

淵源(寧口意義)ヲ解釋セント企圖スルニ當リテ
非常ノ警戒ヲ加ヘンハアルベカラザルナリ
實ニ今後一層精細ナル詮鑿ニ因リテ傳説ノ種
類ヲ分別スルヲ得タル時迄ハ其傳説ヲ解釋ス
ルノ擧ヲ延遷セシムンハアルベカラザルナリ何
トナレハ古代ノ傳説ノ異類ノ混合ニ成リタル
ヲ果シテ眞ナリトセハ其傳説ニ載スル所ノ各
種ノ宗教思想ハ時代ノ新舊ニ於テ區別ヲ為ス
ベキニアラズ只其係屬スル所ノ國ノ殊異スル
ニ因リテ區別ヲ為スベキカ故ニ神祇ノ系圖ヲ

作ルヲ徒勞ニ屬シ又此趣旨ノ議論ニ於テ屢
聞ク所ノ夫ノ日本人ノ原始ノ宗教思想ト云ハ
ル語モ何等ノ意義ヲ有セザルニ至ルベケレハ
ナリ是ニ由テ之ヲ觀レハ古事記及ヒ日本紀ノ
開卷ニ載スル所ノ神祇天ノ御中主神高御產
其開卷ニ載スルガ為ノ必スシモ之ヲ神祇中ノ
最モ舊ク信仰セテレタル者ト看做スベキニア
ラザルヲ猶ホ書籍ノ開卷ニ載スル所ノ序文ノ
必スシモ最初ニ作りタル者ニアラザルガ如シ
然ルニ歐羅巴著述家ノ少シク日本ノ神傳ヲ學

ヒタル者ハ日本人ノ信セ之所ハ元來ニ神教ナ
リト云ヒ又ハ三神教ナリト云ヒ又ハ無上ノ上
帝ナリト云ヒ古事記ト日本紀トニ載スル所ノ
日本原始ノ神各殊異スルヲ知ラザル者ノ如
シ今余輩ヲシテ此問題ニ就キテ強テ考案ヲ下
サシメハ古事記及ヒ日本紀ノ開卷ニ載スル所
ノ獨化神ハ蓋ニ後世ノ發生ニシテ實ニ神官ノ
製作ニ出テタルニ過ギスト謂ハザルヲ得ザル
ナリ或ハ古代ノ人民ハ專ラ此獨化神ヲ信仰セ
シナリ然レ其後伊邪那岐伊邪那美ノニ神及

ヒ其多數ノ子孫ヲ信仰シタルガ為メニ其獨化
神ヲ信仰スルノ念ヲ絶テタルナリト云フ者ア
レ氏余輩ハ古史及ビ祝詞ヲ閱シテ其說ノ是ナ
ルヲ知ルヲ能ハザルナリ此獨化神ノ中高御産
巢日神ニ古事記ニ於テハ第二ニ化生シタル神ト
造ヲ参考スベシ然レ日本紀ニ於テハ其天地創
造ノ説話ノ本文ニ之ヲ載セズシテ只其一書曰
載ノ註解ニ之ヲ外ハ皆一タビ記録ニ登ルノ後
消失シテ復顯レザル者ナリ且日本人ハ勇悍剛
毅ナル人種ナリ性理学ノ議論ヲ好マザル人種
ナリ然ルニ此ノ如キ人種ニシテ初メハ無形ニ

シテ高上ナル神ヲ信仰シ、後ニ至リ全ク其信仰
ノ念ヲ絶チタリト云フノ説ハ、豈ニ信スベケン
ヤ、
然リト雖、此問題ハ畢竟余輩歐羅巴人ノ獨斷
ヲ以テ決スベキ者ニアラス、必スヤ博ク古代ノ
民情ヲ熟知シ古代ノ宗教ヲ學ビテ、其決斷ノ信
認スベキ人ニ囑シテ、以テ決斷セシムベキ者ナ
リ、此他ニ又一問題ノ余輩ノ獨斷ヲ以テ決スベ
カラザル者アリ、何ソヤ、日本ノ神傳ヲ解剖シテ、
此神傳ノ中ニ現今英國ニ行ハレタル「ソーラ

法譯者曰ク「ソラ」トハ蓋シ傳説中ニ載ル地名也
寓言ト見做シ、解ニ因リ解釋スベキ者幾何アリ
ヤ、實録ノ少シク亂レタル者幾何アリヤ、自然ノ
事實ヲ解説スルガ為メノ作ト看做スベキ者幾
何アリヤ、後世神官ノ製作ニ歸スベキ者幾何ア
リヤト断定スル、即チ是ナリ、
此四項中ノ第三
項ハ、本書第三十
七段ヲ以テ例ト
ス、又地名ヲ主ト
シテ、第六
十五段ノ例ト
ス、又其小ナル者
ハ、本書ノ第六
十四段、第六十五
段及第七十三段
ヲ以テ例トス、
然リト雖、余輩竊
カニ思フニ、神傳
ヲ作ルニ當リ、無
生物ヲ假リテ有
生物ト為ス、
「アリヤ

「人ノ神傳ヲ作ルヤ、全ク之ニ及ヒリ」ハ、全ク日本ノ氣風ニ適セス、又一般ニ東洋人ノ氣風ニ適セザル所ナルガ故ニ、若シ日本ノ人情ヲ熟知シタル人ヲシテ、神傳ヲ解釋セシメバ、想像力ニ富メル「アリヤン」人ノ為ス所ニ及シ、必ズ第一項ノ「ソール」法ニ因リテ解釋スル所甚ダ少ナク、他ノ三項ニ因リテ解釋スル所甚ダ多カルベシ、或ハ無生物ヲ假リテ有生物ト為ス「ハ一種ノ語病ナレバ、日本人モ亦此語病ニ傳染スベシト云フ者アリ、然レモ何レノ人モ又何レノ國語モ皆同シ病ニ傳染スベキ理ハ「アテザルナリ、殊ニ日本語ハ全ク比喻形容ヲ用ヒザル國語ナレバ、比喻形容ヲ用フルノ語病ニ傳染スベキ理ハ「アテザルナリ、日本ノ名詞ニ男女ノ姓ナシ、日本ノ動詞ニ人稱ノ區別ナシ、又無生物ノ名詞ヲ他動詞ノ前ニ置キテ其主格ト為シ、「温風ハ氷ヲ換カス」彼レノ談話ハ余ヲ樂マシムト云フガ如キ詞句ヲ遣ヒテ、「風」談話等ノ無生物ヲ假リテ有生物ト為シタル例ハ、上古中古近代ノ別ヲ問ハズ、日本語中ニ未ダ嘗テ見ザル所ナリ、尋常ノ歐

語モ皆同シ病ニ傳染スベキ理ハ「アテザルナリ、殊ニ日本語ハ全ク比喻形容ヲ用ヒザル國語ナレバ、比喻形容ヲ用フルノ語病ニ傳染スベキ理ハ「アテザルナリ、日本ノ名詞ニ男女ノ姓ナシ、日本ノ動詞ニ人稱ノ區別ナシ、又無生物ノ名詞ヲ他動詞ノ前ニ置キテ其主格ト為シ、「温風ハ氷ヲ換カス」彼レノ談話ハ余ヲ樂マシムト云フガ如キ詞句ヲ遣ヒテ、「風」談話等ノ無生物ヲ假リテ有生物ト為シタル例ハ、上古中古近代ノ別ヲ問ハズ、日本語中ニ未ダ嘗テ見ザル所ナリ、尋常ノ歐

羅巴人ト雖^レ「アルタイク」語トアリヤ^シ語トヲ
比較スレバ、一ハ比喻形容ノ語ニ富ミ、一ハ比喻
形容ノ語ニ乏シクシテ、其間ニ霄壤ノ差異アル
トヲ知ラシムル^レ「アルタイク」亞細亞<sup>譯者曰ク、日本、滿
洲、蒙古等ヲ云フ</sup>
ニハ、賢人ノ出ツル^レ甚タ稀ナレ^レ其言語ハ概
皆賢人ノ算番トモ名ツクベキ者ナリ、其實事ヲ
主トシテ潤色ヲ主トセザル^レハ、此語ヲ以テ談
話スル者ノ聽者ヲシテ誤解ヲ懷カシムル^レ稀
ナルニ因リテ知ルベキナリ、故ニ余ハ斷^シテ曰
ク、日本ノ傳説ハ「ソトラル」法ヲ用ヒテ解釋スベ
キ所甚タ少ナシト、然レ^レ夫ノ倭^{ヤマト}建命ノ傳説ノ
如キハ上ニ述ブル所ト異ナリ、此傳説ハ今迄正
史又ハ半正史ト爲シテ、人ノ一般ニ信スル所ナ
レ^レ、然レ^レ其趣旨タル、比喻形容ノ所多クシテ、
「ソトラル」法ヲ以テ解釋スベキ他國傳説ニ類似
スルガ故ニ、若シ此法ヲ以テ解釋スル^レトアバ、
發明スル所必不多カルベシ、<sup>本書第七十九段乃
至第九十一段ヲ參</sup>
考ス、然リト雖^レ、此事タルヤ余輩ノ獨斷ヲ以テ
決スベキ者ニアラザル^レハ、既ニ上文ニ述ブル
ガ如シ、余輩ハ只日本人ノ地位ニ其身ヲ置キ、他

國ノ傳説ニ用ヒテ大功ヲ奏シタル解釋法ソル
指スフ日本ノ傳説ニ應用セント企ツル者ニ向
ヒテ殊ニ戒慎ヲ加フベキコトヲ指示シタルノ
三
此他殊ニ注目スベキ事項ハ古事記ニ載スル所
ノ傳説ノ多クハ後世ノ訂正ヲ經タルキ疑ヒナ
キト是ナリ余輩ハ同書中ニ於テ伊弉那岐伊弉
那美ノニ神ガ大八島ヲ生ミタルトヲ記シタル
ヲ見ルニ逐一之ガ細釋ヲ下ダシテ其知學問上ノ
知識ノ整頓セルト全國ノ未ダ一君ノ統御ニ歸

セザリシ時代ノ知識ニ類セス又日本傳説ヲ以
テ種々ノ本源ヨリ發生シタル者トスレハ其傳
説ノ成分ヲ集メテ之ヲ溶解混合スルト頗ル精
巧ナリ此ニ件ノ如キハ以テ其後世ノ訂正ヲ經
タルニ疑ナキヲ推知スベシ又同ニ傳説ニシ
テ再三本文ニ記載シタル者アルガ如キハ是レ
則チ訂正ノ稍精巧ナラザルト示スニ足レリ
例ハ第火遠ホテリ理命ガ其兄火照命ヲ呪咀シタル
奇恠ナル傳説ノ如キ是ナリ此傳説ハ始メ第四
段ニ記載シ後全ク其文意ヲ改更シテ第百十
段ニ記載シタリ又日本紀ノ「改更」ノ條下ニ記

シタル須佐之男命カ日神ノ田圃ニ乱暴ヲ行ヒ
タル談話ヲ見レハ是レ亦同ジ傳説ノ少シク變
化セル者ニ過ギザルトヲ知ラシニ畢竟此傳又神
説ハ頗ル緊要ノ者タルト明カナリ
武天皇ノ倭ヲ攻畧セシ傳説ト神功皇后ノ倭ヲ
攻畧セシ傳説ト大ニ相似タルガ如キモ是レ亦
後世ノ訂正ノ經タル部類中ニ加ヘテ可ナリ又
神功皇后ガ朝鮮ヲ征伐シタル傳説ハ日本ノ古
史ニ記載シタル氏支那及ヒ朝鮮ノ歴史ニ之ヲ
記載シタルヲ見ヌ又日本紀ニ載スル所ノ年紀
ニ據リテ之ヲ調査スルニ神功皇后ノ夫君仲哀
天皇ハ成務天皇ノ十九年(即チ紀元百四十九年)

ニ生誕セラレ仲哀天皇ノ父君倭建命ハ景行天
皇ノ四十三年(即チ紀元百十三年)ニ歿セラレ父
ノ死去ト子ノ生誕トノ間ニ三十六年ノ間隙アリ
リ矛盾モ亦甚ダシト謂フベシ余輩ガ此年代ノ
意シタルハ「エルク」子ノトナリトク「氏ノ忠告ニ因ルナリ」
又古事記日本紀ヲ細閲シテ知り得タル緊要ナ
ル事項ハ(愛國心ニ厚キ日本ノ註釋家ニ於テハ
毫モ口外ニ發セザリシ事項ナレバ)日本ノ傳説
ノ突起セシ時代ヨリシテ支那ノ感化ノ既ニ其
國ニ波及シ其人民ニ器械ト思想トヲ傳ハタル

是ナリ、但シ此事項ニシテ果シテ真ナリトセ
ハ日本ノ開化ハ本國ニ發生セシ者ニアラスシ
テ外國ヨリ傳來セシ者ナリトノ説ニ一層ノ勢
カヲ添フルヲ以テ緊要ノ事項ト云ハザルヲ得
ス、今日本傳説中ニ於テ支那ノ感化ノ見ユベキ
者ノニニ三ヲ擧ゲンニ出雲及ビ九州(筑紫)ノ段ニ
著ノ事ヲ記載セリ、又伊弉那岐命ノ左右ノ目ヨ
リ日神、月神ノ生誕セラレタルハ支那ノ盤古氏
ノ小説ヨリ變化シタル者ニ過ギス、又伊弉那岐
命ガ挑實ノ援ケヲ籍リテ黃泉國ノ兵士ヲ驅逐

シタリトノ説ハ其本源ヲ支那ニ取リタル者ニ
疑ナシ、又日神ノ傭ヒタル織女ヲ天衣織女ト書
シ、又高天原ノ河ヲ天河ト記シ、其二語ノ支那ノ
名稱ニ符合シタルガ如キハ是レ偶然ノ符合ト
見做スベキニアラス、必スヤ支那ヨリ借用シタ
ル者ト見做サハルヲ得ザルナリ、又傳説中ニ
竈神ノ名稱及ビ其神ノ諸人ニ信仰セラレ、
ヲ載ルガ如キモ亦然リ、本書第二十九段ノ註
解第十六ヲ参考スベ
シ、又傳説ノ頗ル舊キ者ニ酒ヲ醸造スルノ術ヲ
記載シタレ、此術ノ發明ニシテ豈ニ大陸ノ發

明ト關係セザルトアラシク、且古史ヲ吟味スルニ、
通用ノ年表ニ據レバ、紀元第三世紀ノ頃
ニモ、^ノ源之ヲ珍奇物ナリト記シタルヲ見レバ、亦
以テ其矛盾スルヲ知ルニ足レリ、又海神ノ傳説
中ニ記載シタル宮殿ハ、全ク支那様ノ傳説ニ類
似シ、殊ニ其挂樹^{カツ}及ビ鰐魚ノ如キハ、共ニ日本ノ
產物ニアラズ、^テ支那ノ產物タルヲ明カナリ、
又勾玉^{マカ}ノ如キハ、日本ノ神傳ニ著ルク顯出シテ
古代ノ日本人ノ粧飾物ニ用ヒシ所ナレド、^ハ又
リ、フオン、シーホルド^ド氏ハ、往昔其支那ヨリ傳ヘシ

紀元前第一世紀頃ニ珍奇物ト記シ

者ナラシトノ疑惑ヲ起シ、又輓近ニ至リ「ミル子」
氏ハ、全ク人ノ注目セザル方角ヨリ益、其說ヲ證
明シ、勾玉ノ質ヲ為ス所ノ「^ト石及ビ之ニ類
似セル石ハ、未ダ曾テ日本ニ於テ發見セザリシ
礦物ナリト云ヘリ、是ニ由リテ之ヲ觀レバ、勾玉
ノニ三及ビ其質ヲ成ス所ノ礦物ノニ三、^ハ大陸
ヨリ輸載シタル者ニシテ、此勾玉ヲ彫刻スルノ
思想^カ、^リ如キモ亦大陸ヨリ傳ヘシト實說ニ近シ、
鳴鏑^カト稱スル矢ノ一種ノ如キモ亦支那ノ感化
ノ痕跡ヲ示ス者ナルト知ルベシ、但シ博識ナル

支那學者ニシテ精細ニ日本ノ傳説ヲ詮鑿スル
トアラハ右ニ列記スル所ノ者ノ外ニ尚支那傳
來ノ物ヲ發見スルト多カルベシ然レドモ支那
ノ感化ノ日本ニ存在シテ爭フベカラザルトナ
示サシニハ以上陳述スル所ヲ以テ足レリトス
其他支那ノ感化ヲ發見スルニ當リテ之ガ補助
ヲ為ス者ハ言語是ナリ蓋シ上古日本語中ニハ
支那ノ痕跡ノ見ユベキ者全ク之ナキニアラザ
レ氏此事タル今迄人ノ注意セザリシ所ナリ固
ヨリ前世紀ノ日本ノ著述家例ハ貝原氏新井

氏ノ如キハ此支那ノ痕跡ノ存在スルヲ指示
シタリ然レ氏其議論ヲ推究ムルヲナク又支
那ノ痕跡ノ新發明ニカヲ用フルヲナカリシヲ
以テ後世ノ著述家ハ其日本人タルト外國人タ
ルトヲ論セス此事ニ着眼スルト少ナク只支那
ノ痕跡ノ明瞭ナル者ニ三個ヲ擧ゲテ之ヲ論セ
シノニ豈ニ惜カラズヤ試ニ今訓又ハ古訓ニ從
ヒ「カ子」「クノ」「クニ」「サカ」「タナ」「ウマ」等ノ日本語ヲ以
テ支那ノ同義語ナル金、軍、郡、尺、壇、馬、等ニ比較シ
其音義ノ符合スルヲ見レハ決シテ之ヲ偶然ノ

符合 = 歸スルヲ能ハス、必スマ之ヲ支那ノ傳來
= 歸セザルヲ得ザルナリ、又此等ノ言語ノ代
表スル所ノ事物ノ支那ヨリ輸入セシ者 = 疑ナ
キヲ見レバ、發明スル所多カルベシ、故 = 余輩更
= 一層ノ精神ヲ盡クシテ上古ノ日本語(殊 = 其
動植物ノ名及ビ器械製造物ノ名 = 係ル者)ヲ支
那語 = 比較シ、精細 = 之ヲ淘汰スルヲアテハ記
録アラザリシ上古日本ノ時代(傳説ノ未ダ整頓
セザリシ時代) = 當リテ、支那ヨリ傳來セシ事物
思想ヲ發明スルヲ得ベキヤ、明カナリ、若シ夫

レ上古日本語ヲ以テ朝鮮語ニ比較シ之ヲ淘汰
スル = 至リテハ、余輩ハ一層ノ謹慎ヲ加ヘザル
ベカラザル者アリ、何トナレハ、日本語ト朝鮮語
トハ最モ親密ナル關係ヲ有シ、其語根頗ル相似
タル所アルガ故 = 偶、日本語ノ音義ノ朝鮮語 =
符合シタル者ヲ發明スルヲアルモ、一概 = 朝鮮
ヨリ傳來シタル者ト爲スヲ得ズ、語根ノ類似
ノ成績 = 歸スベキ者却テ之レアレハナリ、然レ
氏日本語ノ「ホトケ」(佛)及ビ「テラ」(佛殿)ト、朝鮮語ノ
「チエー」及ビ「チエー」ト相似タル例ノ如キハ、蓋シ

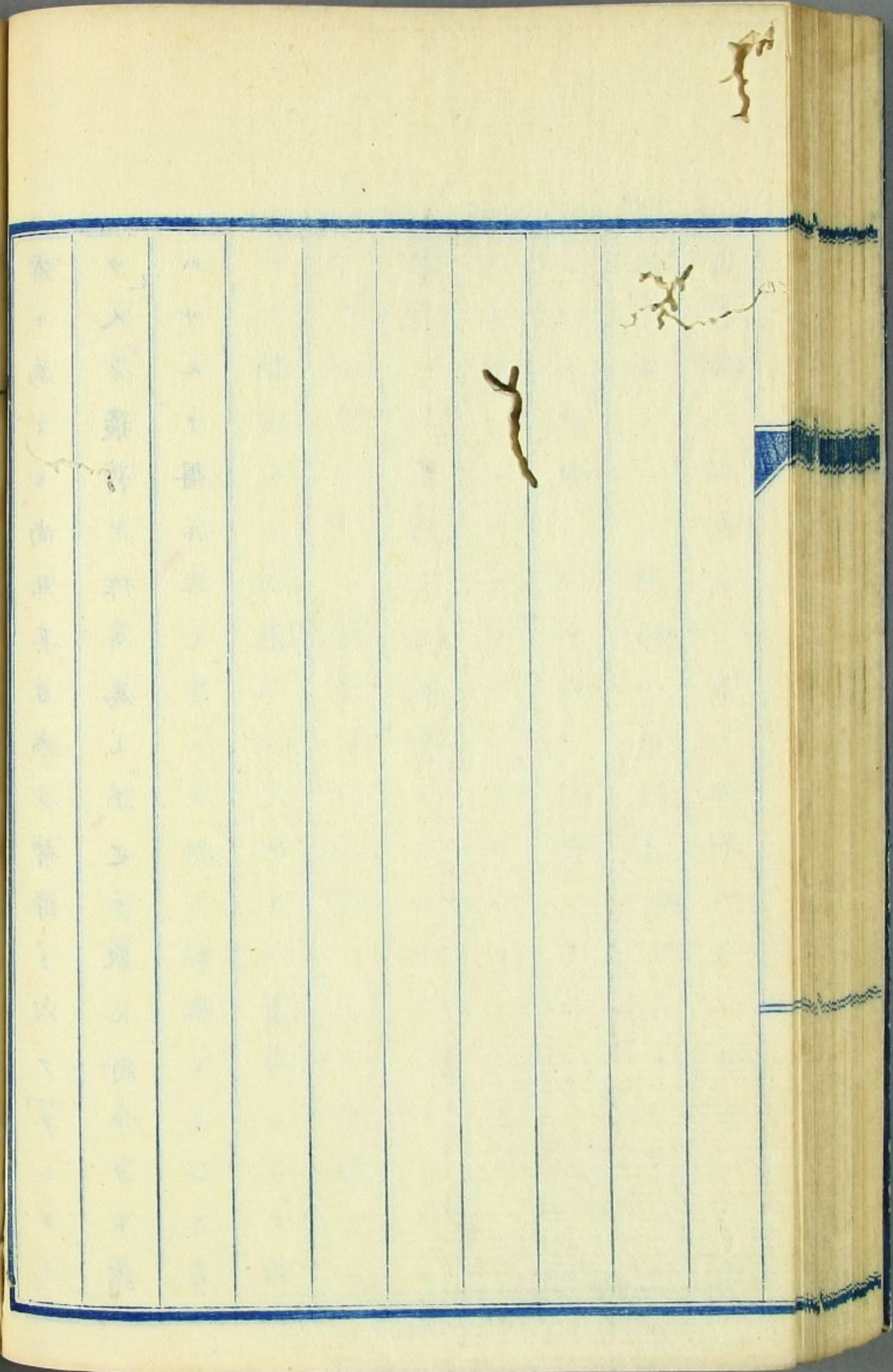
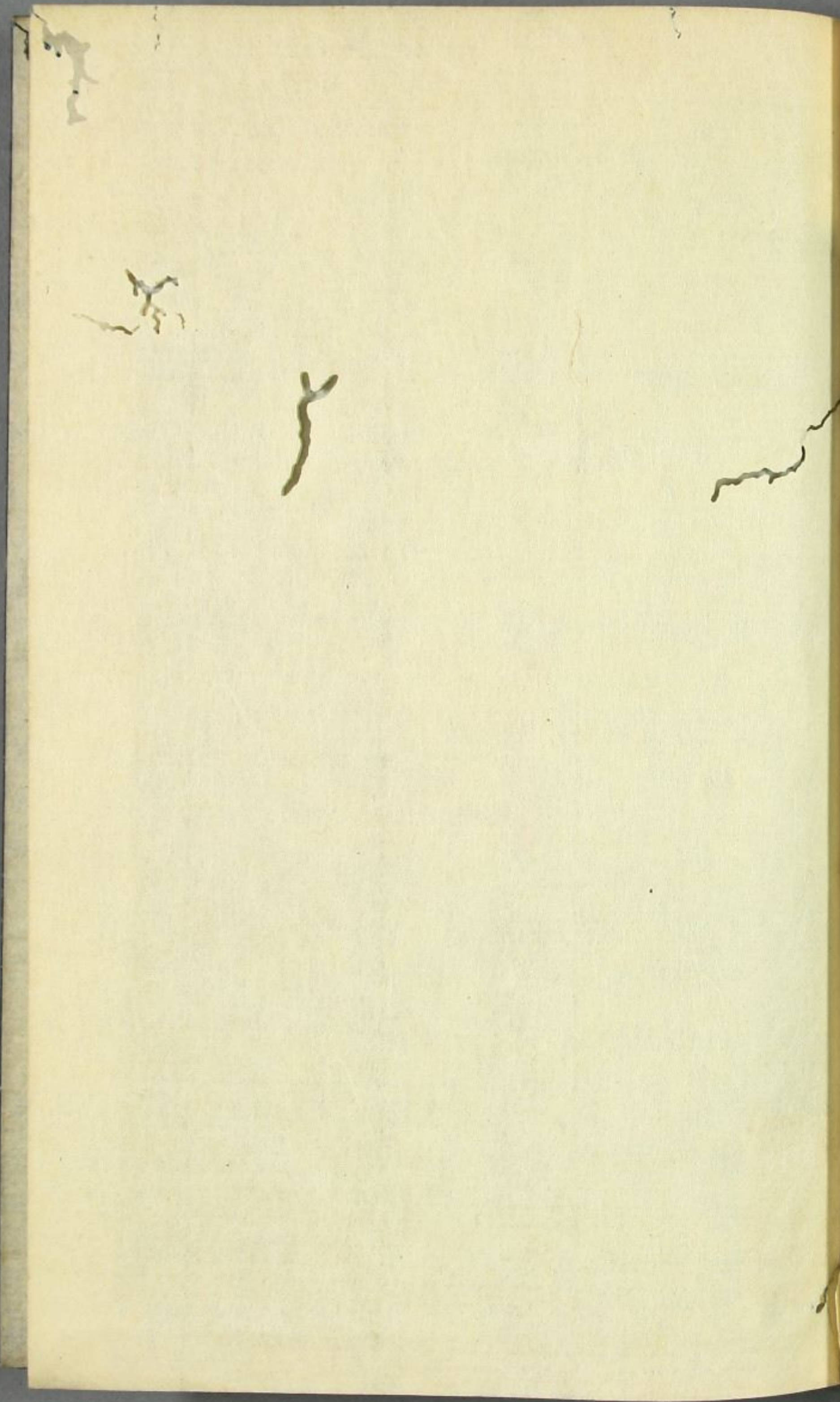
語根類似ノ成績ニ帰スベキ者ニアラス全ク朝
鮮語ヨリ傳來シタル結果ニ帰スベキ者ナリ實
ニ「ホトケ」ト云ヘル日本語ハ數回ノ轉遷ヲ經テ
初メハ印度ヨリ支那ニ傳ハリ次テ支那ヨリ朝
鮮ニ傳ハリ終リニ朝鮮ヨリ日本ニ傳ハリタル
者ニシテ日本語學者ノ狡猾ナルヤ此語ノ由來
ヲ人氣ノニ語ニ歸シタレハ其實決シテ然ルニ
アラサルヲ明ケシ
余輩此他「アイ」ノ(蝦夷)人中ニ行ハル、風俗思想
ノ元ト外國ヨリ傳來セル者ニ説キ及ハント欲

スレハ本篇ノ序說頗ル冗長ニ涉リタルヲ以テ
之ヲ畧シ只左ノ一言ヲ以テ此序說ノ旨ヲ結ハ
ントス抑此譯書ノ如キハ古事記ノ一書ヲ解釋
シテ餘蘊ナキ者ト謂フベカラズ況ンヤ余輩ト
日本古事ノ知識トノ間ノ離隔スル所ノ一大溝
渠ヲ填塞スルニ於テラヤ日本ノ古事ヲ考究セ
ント欲スル者ハ古生物學者ノ補助ヲ藉リテ動
植物ヲ詮鑿シ日本ノ圖書ヲ蒐集シテ盡ク之ニ
批評ヲ下ダシ日本書ノ利益アル者ハ盡ク之ヲ
涉獵シテ其中ニ包藏スル知識ヲ搜出し傍ラ又

支那朝鮮ノ記録ヲ涉獵シテ始メテ其業ヲ卒ヘ
タリト謂フベキノミ、既ニ松下見林氏ハ右ニ述
ベタル目的ヲ以テ夥多ノ支那典籍ヲ涉獵搜索
シタリ其書ハ異稱日本傳ト題シテ頗ル有益ノ
書ナリ若シ余輩ニシテ其一部分ノ翻譯スル
ヲ得ハ此種ノ知識ヲ得ルニ於テ甚タ益多ク
平田氏モ亦日本神道家タルノ見識ヲ以テ日本
ノ古事ヲ詮鑿シタリ余輩モ亦余輩ノ見識ヲ以
テ日本ノ古事ヲ詮鑿ヒザルベカラザルナリ然
レモ今日ニ至ル迄此見識ヲ以テ日本古事ヲ詮

鑿セシ者ハ余輩中ニ甚ダ少ナシ僅ニ「サトウ」氏
ガ數篇ノ論文ヲ撰述シテ本會ノ事務録ニ載セ
タルアルノミ又當會員中ノ日本人ハ或ハ余輩
カ其國史ノ評論スルヲ聞キテ其不敬ナルニ驚
駭スルヲモアラシ然レモ此等ノ人ハ余輩ノ説
ヲ聞キテ日本ノ史學中ニ後來ノ詮鑿ヲ待ツ所
ノ者アルヲ發明セバ亦聊カ慰愉スル所アル
ベシ之ヲ要スルニ日本ノ古史若シ果シテ眞ナ
クハトセバ之ヲ信ゼント欲スルモ之ヲ信スル
不能ハザルベシ余輩ノ主眼ハ唯古史中ニ於テ

其眞偽ノ混淆セル者ヲ淘汰スルニ在ルニ輒
近有名ナル人種論ノ著述家博士「タイ」氏ノ言ヒシ
カ如ク、歴史ニ批評即チ判断ヲ下ダスハ之ヲ疑
フガ為メニアラズシテ、之ヲ信ズルガ為メナリ、
編者ノ誤謬過失ヲ摘發センガ為メニアラズシ
テ、其記事ノ中ニ實事トシテ取ルベキ者幾何ア
ルヲ確知センガ為メナリ、且夫レ實事トシテ取
ルベカラザル者ノ中ニモ、他ノ論點ヨリ之ヲ看
レバ亦取ルベキ者アリ、故ニ余輩ハ日本史ノ最
初ノ一千年ヲ以テ、荒誕無稽信ズルニ足ラザル
者ト為スモ、尚且其日本ノ神傳ヲ以テ「アルタイ」
ク人ノ最舊ノ作ト為シテ、之ヲ取ル所アリト謂
ハザルヲ得ズ、



鳥田藏書

2392
11
9
0

每

